

## 夜の女学校から

## 夜の女専へ

松田 正義

〔旧制〕  
国語

笈を負うて大分からとこと三十時間もかけて上京、芝の鞆絵小学校（三浦環・大辻司郎の母校）に奉職したのが大正の末、同時に松田十代の末でもありました。勤めながら夜学で勉強したいと思い、『東京苦学案内』という本などで適当な大学を物色しました。虎の門から電車で最も便利のよい二、三の大学を選び、内容をよく調べてみると、かねて懂れていた上田万年・山田孝雄大先生を初め錚錚たる教授陣を誇っていた日本大学を選び、迷うことなく受験しました。よい先生について好きを勉強が出来、周囲の協力も得て至極楽しかったが、一面また夜学の厳しきもたつぷり味わいました。

昭和六年に丸山校長に招かれて第六に転任、当時私立夜間女学校が併設されていることを知り、夜間大学出身の私としては格別な関心を持ち、時折謙義も手伝いました。熱心な先生と生徒の努力

で私立夜学校は順調に育ちましたが、昭和十二年に大きな節目を迎えました。第一は「府立」に移管され、質量ともに一人前の女学校になったことです。私にとっても第六から夜学へ転任という大きな節目にもなりました。夜学陣営の一員となったからにはじっくり腰を据えて頑張ろうと固く心に決めました。

の時局が夜間女学校の増大を招き、そのエネルギーが夜間女子専門学校の創立へ、そして終戦後は都立大学理学部第二部へと発展的解消を遂げたので、立派な節目でした。

女専創設の苦心談などを語るいとまもありませんが、私の胸の中では夜間女学校（洗心）と夜間女専とは一連のもの、切り離しては考えられませんが、十八年に女専が発足しましたが私は一回生の卒業をも見ることなく、十九年七月に戦争に追われるように大分へ疎開しました。東京駅で多くの卒業生、在校生諸君が、「螢の光」や「わが師の恩」などを歌って送ってくれました。構内で歌うことを固く禁じていた時代でしたが、あんまり勢いがすすまじいので駅長さんも黙って眺めていました。ジーンと来しました。

十月刊行予定の『方言生活三十年の変容』（桜楓社）の校正作業に追われながらペンを執りましたので、つまらぬことを書き散らしました。ごめんなさい。さようなら。

（八十七翁）

